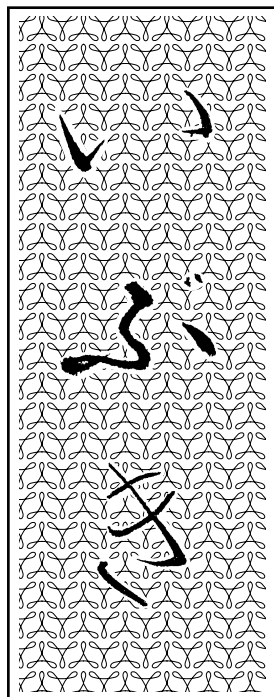




この「誕生佛」は、天と地を指し蓮の花の上に立つ釈迦の姿を現しているが、隠れキリシタン時代にキリスト教徒は、この赤子をイエス・キリストに見立てた。背中に十字架が刻印されている。

「誕生佛」
(キリスト教文化センター
に展示中の
「隠れキリシタン遺品収集」
より)



キリスト教文化センター長 力石 辰也 ちから いし

「いぶき」はキリスト教文化センターの機関紙です。「いぶき」とは、息づかいという生命そのものの象徴であり、生気や活気があるさまを表す言葉でもあります。「春のいぶきを感じる」などという表現もよく耳にします。

聖書の中にはひらがなの「いぶき」はありませんが、漢字の「息吹」は全部で11箇所に出ています。例えば、詩篇33章4節には「神の霊がわたしを造り、全能者の息吹がわたしに命を与えたのだ。」とあります。また、エズラ記16章62節には、「主は人を造って、体の真ん中に心を置き、それに霊と命と知性と全能の神の息吹を送り込まれた。」と記されています。「いぶき」という言葉がもつ意味は、旧約聖書が書かれた時代の人々と現代の日本人との間でほとんどかわりがないようです。

本誌の「いぶき」という名前には、活気や建学の精神を本学の学生さんや教職員の皆さんに息吹のように送りたいという創刊者の意思が感じられます。近年の学生さん達は厳しい勉強で疲れていますし、教職員の皆さんも日々の業務で慢性的に疲れています。医療は高度化し、社会は医療に対して容赦することなくますます厳しい要求をしています。今や癒しが必要なのは、患者さんばかりではなく、むしろ医療従事者です。東日本大震災や原子力発電所の事故が、日本人全体を疲れさせているようにも見えます。そのような状況の中で、本年4月から、私達は4人の新しいシスターをお迎えしています。癒しが欲しい人、話を聞いて欲しい人はためらわずに声をかけてみてください。そんな皆さんに、シスター達が「いぶき」を吹き込んでくださるのは間違いないと思います。

(腎臓泌尿器外科学教授)

病院総合案内…シスターの紹介



ヌヴェール愛徳修道会
シスター
井上 利恵子

はじめまして ヌヴェール愛徳

修道会のシスター井上利恵子です。今年度4月から、毎週月曜日に聖マリアンナ医科大学病院の総合案内の受付でお世話になっていきます。慣れない仕事のため、5ヶ月たった今もうろろしています。痛みや苦しみをもって病院に來られる方たちに、少しでも穏やかさや優しさ、そして希望を分かち合うことが出来ればと願っています。

3月11日の東日本大震災から6ヶ月です。引き裂かれた街、消えた日常の中で、多くの方が今も続く苦しみ悲しみを共に、言葉に表現出来ない程の傷をもちながら、それでも生き続けていらつしやいます。そして、復興の歩みは確実に始まっています。神様から頂いた生命の力ってすごいなとい

つも感動しています。

学生のみなさんも、頂いた命を大切に、未来に向かってその命を大切に、未来に向かってその命を輝かせながら生きて欲しいと祈り応援しています。



マリアの宣教師フランシスコ修道会
シスター
金澤 景子

はじめまして。私はマリアの宣教師フランシスコ修道会のSr金澤景子と申します。この4月から毎週火曜日に病院総合案内で受付の仕事をしていただいています。

今までまったく縁がなかった「病院」「医療」という現場を、週に1度体験させていただくようになり、早いもので6カ月が過ぎました。ひっきりなしに病院の玄関を出入りされるたくさんの患者さん達、付添いのご家族、面会に來られる様々な方々とのほんの短い関わりをとおしても、この病院の中

にどんなにたくさんの方々が集まっているのかと、いつも圧倒される思いがしています。また病院聖堂にあるノートには、毎日聖堂を訪れる方々のいろいろな思いが書き留められており、それは自然と私の毎日の祈りの中で思いつくように思いました。誰かがいけばん弱く、脆くなっている時に、それぞれに与えられた役割をとおして、その人に寄添っていかうとする事の力強さを実感させられつつ、私もつたないながらその交わりに繋がっていきたくと願っています。



ヌヴェール愛徳修道会
シスター
重松 千恵子

私は、今年四月から水曜日と金曜日に総合受付（午前中）と病棟の患者訪問（午後）をしています。フランス中部に総本部があるヌヴェール愛徳修道会の会員です。私たちの会は「神は愛である」をモットーとして「御父のいつくしみ、神の愛を世にあらわす」という使命を果たすために、貧困と疎外を刻印されている世界の種々の地

域、歴史のさまざまな場に派遣されるのです。私はシスターと同時に社会福祉主事として、日本各地にある被差別地域、疎外されている人たち、社会の片隅に追いやられている人たちと共に生きてきました。タイランドではスリン県の貧しい子供たちに教育の支援、スラムの人たちの生活向上、東北の最も貧しい村（電気も水道もない）では人権と開発のために働いてきました。神様ご自分に似せて創られた「人間」との関わりを仕事としてきました。

いろんな出会いがありました。悲しい、辛い、苦しいそしてなんでも裏切られたこともありましたが、それと同時に楽しい、嬉しい、喜びと共に忘れられない人たちの出会いもありました。今また聖マリアンナ医科大学病院で沢山の人たちとの出会いができています。期待と希望を持っています。人間はどんな境遇であっても希望をもち続けられます。「生きたい」という希望、明日、未来に対するあこがれを持つ事ができるので。末期患者と出会っています。病に苦しむだけでなく、人間として、最後の最後まで人間の尊厳を大切にしたいと思っています。医療関係に将来携わる人た

ちにお願ひがあります。病気の根治だけに専念するのではなく、病める一人の人間として、又その背後にある家族のことを考慮しながら、すべてを包み込んだ治療をして頂けたらと切に願っています。



ドミニコ女子修道会
シスター
竹元 しのぶ

総合案内を火・木曜日で担当しています、ドミニコ女子修道会の竹元しのぶです。

私たちドミニコ会員は、昨年創立800周年を迎え、真理をモットーに教育事業、福祉事業を主に取り組んできた修道会です。

さて、この8月に私は東京のカルメル会で「年の黙想」を行いました。その折、聖マリアンナ医科大学元理事長前田徳尚先生の御夫人、前田和子さまが翻訳されました本に出逢い、その恵みを紹介させていただきたいと思います。その本は「アヴィラの聖テレサ」で、16世紀スペインで 神の現存を体験された貴重な霊的生活の歩みが綴られております。

21世紀に入り、自然界、人間界

は、根底からの問いかけに大きく振り動かされ続けています。東日本大震災の出来事をはじめ、私たち一人の在りように新たないのち 課題が問われるようです。

―あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。

(フィリピン人への手紙2章13節)

皆さまお一人おひとりの人生に聖テレサの取りつぎによって万物の創造主、いのちの源、神さまの祝福を心よりお祈り申し上げます。



サレジオン・シスターズ
シスター
鳥巢 孝子

厳しい暑さが続いています。このような気象状況の中で、特に患者の皆様には心身共ご負担のことと思ひ、祈りつつ、聖マリアンナ医科大学病院へ通う今日この頃です。私は、週二日、総合案内と病室訪問等の奉仕をさせていただき、今、四年目を過ごしておりますサレジオン・シスターズのシスター鳥巢孝子です。私どもの修道

会は青少年の教育のために創立された修道会ですが、今年は8月5日をもって創立140周年を迎えました。

人間には病氣、苦しみがつきまとい、人生を悩ませます。病氣は自分の無力、限界、または死をも垣間見せ、不安や絶望の淵に追い込んでしまうこともあります。またその反面、人間としての成熟のきっかけとなり、自分の人生の本質的なものへと向かわせてくれるものであることを、患者さんとの出会いの中で感じさせられ、学び、深く感動させられることがしばしばあります。学生の皆様や多くの方々との出会いを大切に、貴重な日々を過ごさせていただいていますが、これからもどうぞよろしくお願ひいたします。



聖フランシスコ病院修道会
シスター
木澤 寛子

私は、聖フランシスコ病院修道会 女会 東京修道院に所属しております。医療的には理学療法士の資格を持っていますが、修道会から臨床パストラル教育研究センター

に派遣されて、スピリチュアルケアに関する仕事をさせていただいています。日本の社会に、いまだ認められているとは言えない人間のスピリチュアルな側面、すなわち人間として生きることの質に関する、思想、良心、信仰、および自由などの分野のケアが浸透することを目指しています。聖マリアンナ医科大学病院には、毎週木曜日に勤務して、受付と患者さんのそばに居て、患者さんが自分の人間としての深みに気づくことを支えたいと願っております。

同時に今、宮城県の女川と亘理の被災地にボランティア活動をしています。被災者の方々のなかには、長いお付き合いが必要とされる方がおられるでしょう。文通を通して、将来のために今を苦しんでいる被災者と将来の病める人たちのために今の勉強に苦しむ医学生が、両者互いに励ましあうことができたらいいなと考えています。被災者は物質がほしいのではなく、関わり合いを求めているように感じます。将来の医者とかかわりが持てたら、どんなにか嬉しく、頼りになると思うに違いありません。聖マリアンナ医科大学の医学生のご協力をお願いしたいと思っています。

祝受章

「ローマ教皇庁大聖グレゴリオ勳章騎士団章」

前田徳尚先生、おめでと〜ございます!!

昨年12月4日、本学の特別顧問を務められている前田徳尚先生に、ローマ・カトリック教会の現教皇ベネディクト十六世より「ローマ教皇庁大聖グレゴリオ勳章騎士団章」が授与されたことは記憶に新しいことと思います。同



勳章の受章者は日本では11人目となりますが、聖職者以外では初めてとのこと

で、「永年に亘る医学教育および医療事業における日本社会とカトリック教会に対する貢献と功績は顕著であり感謝に値する」との理由により、一般人としての最高勳章を受章されました。

そのお祝いを3月29日、聖マリアンナ医科大学を代表して、明石理事長、力石キリスト教文化センター長、2人のシスターとともに前田先生のお宅を訪問し、大学からの受章記念品を贈らせて頂きました。先生はご自宅で御夫人とともに迎えて下さり、受章時のお写真とともに、勳章を見せて下さいました。その際「この勳章は、私一人ではなく、みんなで戴いた、マリアンナのみんなのものです。」



と仰った言葉が印象的でした。また「(勳章を)つけてみるかい?」とユーモアを交えてシスター方におたずねになるお姿に、先生が永年信者として歩まれて来たカトリック教会との親交の深さを見せて頂きつつ、穏やかな一時を過ごしました。勳章受章とともに、ますます健やかにお過ごしされますよう皆でお祈り申し上げたいと思います。

(キリスト教文化センター

中村 真理

「まんなかのいのちのちへのまなざし

〜未来の医療をつくる〜」

日本カトリック医師会

第27回カトリック医療関連学生

セミナーへの参加報告

8月27日(土)から28日(日)まで、日本カトリック医師会主催、聖マリア病院(久留米市)が事務局となり「カトリック医療関連学生セミナー」が開催されました。日本カトリック神学院福岡キャンパスを会場に、「まんなかのいのちのちへのまなざし」というテーマのもと、全国から集まった多くの学生とともにグループワークで語り合う活気のあるセミナーとなりました。

1プごとに「いのちの尊厳」「人間の尊厳」「医療に期待されていること」を共に考え、将来世代が「つなぐいのちへのまなざしについて、福音の照らしと導きという視点から話しあった二日間でした。

そして最後に、福岡教区の宮原良治司教が「司教団メッセージ『いのちへのまなざし』をめぐって」と題して同メッセージについて説明しつつ、すべての人が「人格の完成」に向かう重要性を説き、派遣のミサとともに閉会となりました。

来年は、名古屋で開催予定とのこと。学生セミナーということもあり、本学からの参加も大いに期待されています。興味ある方、一緒に参加しませんか。詳細は、キリスト教文化センターまでお問い合わせ下さい。

(キリスト教文化センター

中村 真理

第一日目のはじめに「東日本大震災の大津波をまともにかぶって生き延びた一人として」、宮城・気仙沼で津波被害を受けた医師の木島三夫先生が、犠牲となられた兄弟夫婦と三男の鎮魂の詞として特別講演をされ、参加者全員が心を揺さぶられ、今あるいのちをどう生きるか、あらためて問われたように思いました。その後も、各講師による短い発題の後、グル

アルフォンス・デーケン先生にインタビュー

医学部3年 山田 将平

私たちデスエデュケーション勉強会

は、死生学の権威であり、上智大学名誉教授であるアルフォンス・デーケン先生とお話をする機会を頂くことができ、7月18日、デスエデュケーション勉強会を代表して3年の柴田、出口、山田、2年の竹内の4人で上智大学に向かいました。

デーケン先生は、長年に渡り上智大学において「死の哲学」など死生学についての講義を行い、日本にいち早く死生学という概念を取り入れた方です。以前から日本では「死学」という言葉があったものの、死のタブー化の強い影響もあって、まだ学問として確立されてはいませんでした。死を考えることは同時に生を考えることでもあるため、「死学」という言葉を使わず、「死生学」という言葉で、その概念を日本に定着させたのがデーケン先生です。死生学とは、医学・看護学・教育学・文学・哲学・宗教学または芸術などの様々な領域にわたって学際的にアプローチする学問であり、「死への準備教育」は、その実践のひとつです。

面談の中でお聞きしたことをいくつか紹介いたします。

Q、日本人の生と死の考えは、他国と比べてどう感じましたか？

A、まず、日本人は儒教を信じている人、仏教を信じている人、宗教を信じていない人、それぞれが異なる考えを持っている。さらには仏教を信じている人の中でも宗派によって考え方が違います。

一番キリスト教と比較して違う点は、死後の考え方です。キリスト教では死は終わりではなく、天国への門だと考えます。一方で、日本人は死後についてとても曖昧に考えているように思えます。そのため、日本では死という概念が曖昧になってしまっているのですね。

Q、医師を目指すものとして、どう死生学を学んでいけばよいのでしょうか？

A、近年は日本語の死生学の文献が増えてきています。特に、医療関係者向けのものとして読むならば、ホスピス関係のものをお勧めします。

私は、死という概念を肉体的な死とは別に、心理的・社会的・文化的な死の4つの側面に分けて考えています。肉体的な死以外にも、生きる意欲を失う心理的な死、家族から見放され孤立した社会的な死、文化的な潤いのない状態に置かれた文化的な死があります。

20世紀は医学の発達により肉体的生命の延命を可能としましたが、患者のQOL（生命や生活の質）を向上させることにはつながっていません。そこ

で、21世紀の医学の挑戦は肉体的生命の延命と同時に心理的・社会的・文化的生命の延命、つまり総体的生命の延命を図ることが必要です。これにはホスピス関係の文献が役に立つでしょう。

今回、この面談を通してとても印象に残ったことがあります。

それは「死」という日本では暗くタブーだと考えられている話題について、ユーモアを交えて明るくお話しされていることです。「死」とユーモア、私たち日本人にとってこれは全く別次元のもののように感じてしまいがちですが、あえて暗いイメージのある「死」の話題に、ユーモアのある「笑い」を取り入れることにより、私たちはデーケン先生の話に引き込まれていくのを感じました。もちろん「死」の話題にユーモアを取り入れられるのは、デーケン先生のこれまでの経験や深い死生学への理解によるものだと思います。しかし、ここにこそ、死生学を学ぶ際、なによりも大切なことがあるのではないかと感じました。

死生学を学ぶということは、決してネガティブなことではありません。死と向き合い、最後まで人間らしくよく生きることを目指すのですから、むしろポジティブなことです。頭では分かっているつもりでも難しく考えてしまいう私にとって、わかりやすく、ユーモアを持ち、自ら体現しているデーケン先生には大変驚かされました。

アメリカの調査で、一般国民よりも

医師の方が死に対する恐怖が強いというものがあります。確かに、職業上死を過剰に恐れてしまうのかもしれないが、患者とともに死と向き合うべき医師が、より恐怖を感じていては患者との良いコミュニケーションがとれるはずありません。そのためにも、デスエデュケーションは医療従事者にこそ必要なのです。これからデーケン先生のようにポジティブに、死生学の探究を続けていきたいと思えます。

今回の面談の機会を与えて下さった皆様に感謝し、ご報告を終わらせていただきます。

※ ※ ※ ※ ※

※11月12日(土)にデーケン先生の講演会を予定しています。どうぞお時間ある方は、ご参加下さい。詳細は、キリスト教文化センターまで。



左から（山田、柴田、A・デーケン先生、出口、竹内）

キリスト教文化センター活動状況(平成22年度)

4月12日

新入生オリエンテーション

5月19日

新入生歓迎会

特別教育施設「聖堂」において、明石勝也理事長の話、聖マリアンナコーラスクラブ(MCC)の歌、フランチスコの祈り後、軽食のテーブルを囲み、歓談の一時をとおして親交を深めました。



8月21~22日

日本カトリック医師会主催「第27回カトリック医療関連学生セミナー」(会場…聖マルチン病院(香川県))へ参加



12月14日

クリスマスの集い

特別教育施設「聖堂」にてMCCの協力のもとクリスマス会を開催。明石理事長の話、福田司祭の祈り、MCCとの合唱後、会食、100名以上の学生・教職員が集まり、共に聖歌を歌い、歓談し、クリスマスの行事を楽しみました。



12月17日

クリスマスコンサート

教育棟ロビーにおいて、本学管弦楽団とキリスト教文化センター有志のコーポレーション演奏会を開催。お昼休みの間に多くの学生・教職員が「アヴェマリア」「きよしこの夜」などの楽曲を聴きに集まりました。



一日常風景一



学生の声

■医学部2年 稲田 享希子
「一年生？」

その一言から全てが始まった。キリスト教文化センター（以下、キリ文）に足を運ぶようになったのは、些細な一言がきっかけだった。

新入生として入学したての頃は何もかもが初めてで、学年が近い先輩との交流がない部活に所属している私にとって、どのように生活して行ったらいいのかわからなかった。そんなある日、キリ文に足を運ぶと、先輩が座っていた。すごく人見知りの私は立ちすくんでしまったが、先輩方が優しく話しかけてくれるのだった。

次第に顔馴染みになり、授業試験のこと、部活関係なしに仲良



くできる先輩が自然にたくさんできた。更に、シスター、先生方とお菓子をつまんで他愛のない会話を楽しんだ。

大学で過ごしてきて、私は自分が激変したと感じている。浪人時代の記憶や自分の殻に閉じこもってばかりで、何も変えようとしないうちに自分がある仲間、今の自分と向き合うこと、新たな自分を形成することを教えられ、肩を押さえてくれた。それも『マイペース』でいいんだよ、と。少しずつ、少しずつ、と。

お菓子をつまんで少しずつ身体的に『肥え』、キリ文で心にもエネルギーをもらって精神的に『超え』、そうして学年進級の壁も『越え』ることができた。

何事も少しずつ。弱い部分を自分からさらけ出せること。汚いプライドは捨てて、美しい誇りを持つことができたならなんということだろうか。

キリ文で育っていく未来の私は、卒業を迎える時にはどうなっているのだろうか。その時の自分に会えるのを楽しみにしている。

■医学部2年 田宮 広樹

キリスト教文化センターは私にとって休み時間の憩いの場所というだけでなく、いろんな意味で成長させてもらえる場所です。休み時間は傍で先生や先輩、後輩、シスターなどいろいろな立場の人の交わす会話を聞いたり、ピアノを弾いて和んだりなどしています。いつも優しい雰囲気が出ていて、誰かと話したいときも一人になりたいときもキリスト教文化センターにふと行こうかなと考えてしまいます。大学に入ってから戸惑っていた時もういろいろと助けてもらいました。



た。キリスト教文化センターで働く中村真理さんやよく訪れるシスター、先輩の方も優しく、話を聞いてくれます。

自分にとってこの場所はホッとする場所であり、時に逃げる場所でもあります。あと少し个性的でユニークな人たちが集まってくる場所でもあるなと感じています。これからいろいろな人と出会っていくのが楽しみです。

■医学部2年 三井 愛

本学のカリキュラムは、国試合格という観点を中心に組まれており、学生が真面目に取り組むほど、医学学習以外のことを考える余裕を失う面があると思います。医師になるための物理的プロセスを習得するため、それは正しい方法だと思いますが、同時に、それ以外の大切なことを考える時間が医学学習と代替関係になっているような気がします。

私は時々、キリスト教文化センター（以下「キリ文」）に行きます。日々の医学学習の中でつい置き去りにしてしまう考え方を求めてというか、沈黙思考を求める心を満たすために赴くとも言えるでしょう。例えば、世界では色々な意味で歴史的に大きなパラ



ダイム転換が起こっていますが、そのような中でも決して変わらない人間のあり方とはどのようなものか。逆に、歴史や地域を超えて共通であるはずの人間の感情、例えば愛には、如何なる多彩な表現様式がありうるのか。そのような、人間に対する考察を深めたいと思った時、私はキリ文で本を手にとってみます。

普遍的な人間の思考や行動様式というものは、それが本質的であり、正しいからこそ普遍性を獲得したのだと思います。本質を見失わないことは、如何なる環境においても自分の思考や選択に自信を持って前に進む上で必要な要素であると思います。キリ文が多くの学生さんたちにとって憩いの場であると同時に、医師になるための精神的プロセスを充足するような場であってほしいと私は願っています。

■ 本棚から ■

平成23年9月12日現在、当センターには、キリスト教関連の書籍・492冊 DVD・57本 CD・10枚が所蔵され、いつでも自由に閲覧が可能です。貸出しにも対応していますので、どうぞご利用下さい。



編集後記

まずはじめに、この度の東日本大震災の犠牲者の皆様に心よりお悔やみを申し上げますとともに被災された方々にお見舞いを申し上げます。3・11以降、私たちは多くの痛みをともない、今もまだその渦中にいます。しかし同時に、この現実新たな息吹をふきこむような、人と人との繋がりの中でのアクションが実際にはじまっているのもまた事実です。大いなるいのちのうねりの中で、私たち一人ひとりが目覚め、自分のできごとから行動を起こすこと、その気づきが、今具体的に促されているように思います。

表紙の「誕生佛」は、天と地を指し、蓮の花の上に立つ釈迦の姿を現わしています。隠れキリシタン時代にキリスト教徒は、この赤子の姿をイエス・キリストに見立てました。蓮は泥の中であってこそその美しい花を咲かせるそうですが、イエスも仏陀も、混沌の世の中であって隣人の痛みに共感して行動し、具体的な人と人との間でのいのちをまるごと「人・間」として開花させた人物だと言えるでしょう。時代を経て縁あってここにこの誕生佛。私たちに、あなたのいのち（花）をどう生かしますか？と問いかけてくれるのかもしれません。

お届けする「いぶき」の題字は、創刊時に創立者故明石嘉聞博士のご夫人、明石田鶴子先生から頂いたものだそうです。この名に建学の精神をいつも活き活きと届けたいという願いが込められているのを感じます。この78号が多くの方の協力を得て無事に発行できる事に感謝するとともに、今後も創立時の息吹に吹かれつつ各方面の方々よりご指導を仰ぎながら歩んでいけたらと願っています。

(中村 真理)

発行 聖マリ安娜医科大学

キリスト教文化センター

〒216-8511

川崎市宮前区菅生2-16-1

〇四四(九七七) 八一一

編集 力石 辰也

印刷 城南印刷センター